

教育的要素たつぷりだった トーゴーカーメラの実演販売

平野 武利

『さあさあみんなもつと前へ寄つておいで見ておいで、これが東郷元帥と同じ名前のトーゴーカーメラだ、「パチリ」と写してすぐ、この昼間に現像がさちやうというから不思議だ。』

昔から泥棒と写真は、夜まっくらになつてからやるものと決まっていたんだが、このトーゴーカーメラは我社の研究陣が研究を重ねて、ついに白昼堂々とできるよつになつてしまつたのだ。これでは江戸のネツミ小僧も顔まげだ。

さあさあずつと前へ寄つておいで、「あなたが見たけりや、私も見たい」早く写して見せてくれというのが人情だが、これは普通のまやかしものに見世物とはチョツトちがう、あの東郷元帥から「青少年のために大いに普及しなさい」とお墨付きをいただいでしまつたほんものだ。

東郷元帥は君たちも知つてゐる通り、連合艦隊司令長官、当時世界最強のロシア、バルチック艦隊を迎えうち、我が艦隊は一列に横にならんで、主砲を放つたからたまらない、たちまち敵のロジエストウインスキー中将は白旗を上げて降参してしまつた。……

トーゴーカーメラはこの連合艦隊のように一発必中で良い写真がとれるよつこの名をつけたのだ。……実は警察のその筋から「東郷元帥の名を付けるとは畏れ多いのではないか」と改名を命じられたことがある。長束（ながつか）（正規社長は東郷元帥の私邸に菓子折りをもつて訪れた。裏木戸から入り、女中さんにたのんで元帥に面接しカメラの説明をしたところ、「これは青少年のために大いに普及すべし」とトーゴの名をつけることを許されたという。当局もこれをたしかめるすべもなく以後黙認したというエピソードがあるが、本当のことは社長しかわからない。』

さて話を始めにもどそう。
トーゴーカーメラは昭和5年、鹿児島出身の長束社長と他2名の義兄弟のカメラ好きの3人ではじめられた。名前は同郷出身の英雄東郷平八郎からつけたのだ。はじめは一円のボックスカメラからスタートしたが、蛇腹のあるハンドカメラ、ライカ型カメラ、後にレンズが横に並んだ二眼レフの独特の型など数多くの品種がつくられた。

フィルムは小西六（いまのコニカミノルタ）から供給を受けようとしたが駄目なので、やむなくベルギーのゲバルト社から輸入した。それも満州事変（昭6）で入手困難になつてからは富士の映画用フィルムがやつと引けたというのでこれを使ったという。

私は昭和15・6年頃水道橋の角の府立工芸、（いまは名前が變つて都立工

芸高校）へ通つてゐた。帰りに図案でよく使うポスターカラーを買いに、いまもある神保町のすずらん通りの文房堂へよく通つたものだった。ところがその鼻の先にトーゴーカーメラの販売店があつたのである。
「さあさあ寄つておいで見ておいで」というセリフでやつてゐる店の前はいつもいっぱいの人だかり、カバンを斜めに肩から下げた中学生もいれば、ねんねこで赤ん坊をおんぶした子守のお姉ちゃん、中折帽子をかぶつたおじさんもゐる。

「こつちの赤い液体が現像液といつて絵をだす薬、赤いから赤垣源蔵だ、こつちの緑の方は定着液といつて絵をとめる薬だ」

店の前の大きなホーロー引きのバットのなかに赤い液と緑の液の入つた手のひらに入るほどの小さなセルロイドのバットが二つ並んでゐる。もうみんな像の現れるところが見たくてじつとまつてゐる。店頭の撮影からフィルムの現像・定着・水洗・乾燥とやつてそれから印画紙への焼付けだ。

最盛期には朝鮮、台湾、満州までふくめて33ヶ所の直売店と約千軒の特約店を擁したというが、その販売法のユニークなところは、お祭りの夜店まで出ていつて販売員が面白おかしく実演してみせたことであつた。

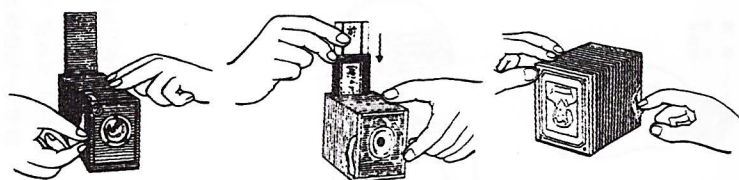
さて私は毎日のように帰りは神保町でこの実演を見ていつてすつかり写真術をマスターした気分になつてしまつた。そこで少し本気になつて写真材料店でおそろおするガラス管入りのM・Q現像液と酸性定着液を買つてきて水に溶かしてみておどろいた。両方とも透名でその区別が全くつかなくなつて困つてしまつたのだ。あらためてトーゴーカーメラの偉大さに気がつくのであつた。そして私は迷ふことなく、写真と印刷の道へ進むのであつた。



長束正規氏、東郷元帥の葬儀に参列したときの肖像



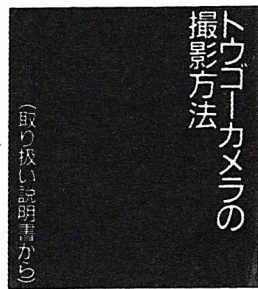
東郷室にはおしゃれな制服があつた



シャッターあけて露光する。バルブのみ。露出表に従つてやれば間違いない。とある。だいたい1秒から20秒。

動かないようレンズのふたをし、後方の隙間に種板と呼ばれる感材を差し込む。

被写体にレンズを向け、横のシャッター（開閉器）を開いてピントグラスをのぞく。反対に映る像が裏人中にくるように位置を決める。





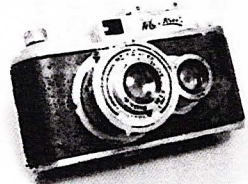
ミカサ号 1930號
固定焦点・単レンズ
B・1シャッター3×5
重さ105g



メイコーA 1930頃
単レンズ・パテントシャッター
O.I.B. 4×6
紙フィルムバック



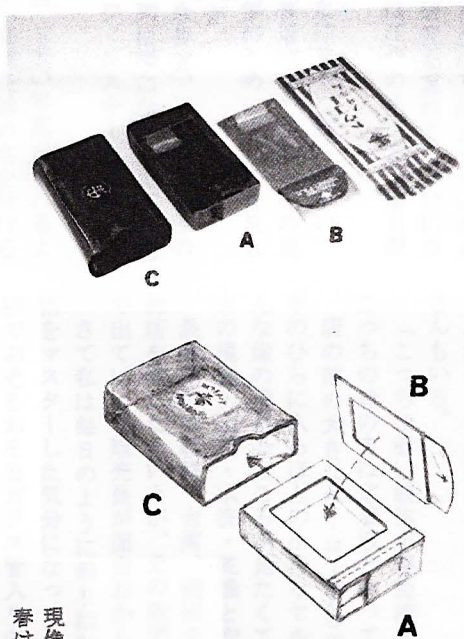
メイリット 1940頃
単レンズ パテントシャッター
B.1 28×40mm
紙フィルムバック



メイカイレフ(2眼レフ) 1940頃
M.K f3.5 50mm 3×4
T.B. 1/25~1/200
特殊ロールフィルム(映画フィルム)

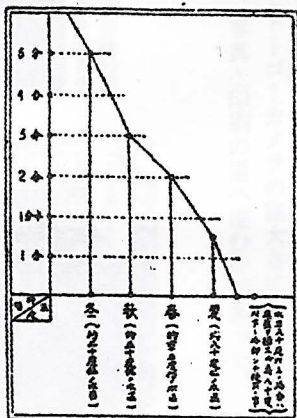


店頭販売風景・「アサヒカメラ」1955年6月号から

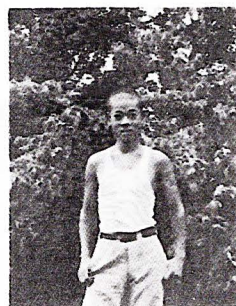


白昼現像器の主体はたばこの箱ほどの黒いセルロイドの箱(A)で上面はフィルムが大ききだけスッポリと空いており前後は液が入り出せるが光が入らないようになってる。この上面に露光した紙フィルムパック(B)を伏せて乗せ、これらをスッポリ包むような黒いセルロイド製の四角い筒(C)にはめ込んで、これを現像液のなかに入れ紙の引きぶたを抜きとって現像するのである。(図参照)

現像液/温度/現像時間/割合



現像時間は夏、一分五秒、冬五分位で春は二十℃で二分位を目安にする。



東郷カメラで撮った自画像

資料は月刊誌『アサヒカメラ』より
①1935・6月号 「この道ひとすじに」 東郷カメラ
②1932・10月号 「D・Oクラの写真化論」 『教育的要素たっぷりだったトローゴカメラの実演販売』
③2001・11月号 『覚えていきますか? トローゴカメラ、ボクラ「小国民」の宝物』(又)
○カメラは元全日本クラシックカメラクラブ会員 山本重治氏より拝借



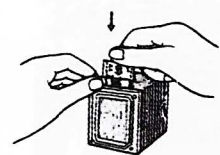
焼き付け時間は「拾六燭光で拾式秒、五拾燭光で四秒」などとある。この後に現像し乾燥で終わり。慣れるまでは結構大変だ。



焼き付けの準備。焼き枠の上に原板と印画紙を重ねる。電灯を使った電氣焼き付けた。なるべく夜にやれとある。



現像キット。赤色を感じない当時のフィルムの弱点を逆手にとり、赤い現像液中でフィルムの紙フォルダーを破るというアイデア。



露出が終わったら、シャッターを開き、覆板を元のとおり戻す。